

快適な北国の暮らしを実現するため、高速道路ネットワークの整備や安全・安心の道づくり、シーニックバイウェイ、道路環境の整備などさまざまな道づくりの取り組みがなされています。

一番身近なところにあり、社会生活に不可欠な社会資本である道路をもう一度、地域という立場から見直し、新しい関係を築いていく、そういった時代が来ています。今回は、それぞれの地域で特徴ある地域づくりを実践している方々に、「地域づくり」と「みちづくり」の新しい関係についてお話していただき、未来のみちづくり・地域づくりにつないでいきます。

## 道南圏の地域づくり・みちづくりと コミュニティFMの役割



杉田 圭夫 氏  
FM いるか局長

インタビュー

林 美香子 氏  
フリーキャスター

### 日本で初めてのコミュニティFM開局

林 今日「FMいるか」のスタジオがある函館山中腹のとても眺めのいい喫茶店にきています。FMいるかは全国ではじめてのコミュニティFM放送局ということですのでぜひぶん話題を呼びましたが、創立の経緯についてお聞かせ下さい。

杉田 FMいるかは1992年12月に開局しましたので、今年で14年目になります。

林 今ではコミュニティFMが道内にもたくさん増えて身近なものになりましたが、そもそも普通のFM放送局とどう違うのですか。

杉田 簡単にいうと、一市町村の限られたエリアで放送するという事です。一昨年の市町村合併にともない、昨年8月にサービスエリアを拡大しました。

林 函館の地域に密着した放送局をとというのは社長さんのお考えですか。

杉田 そうです。FMいるかは、第3セクターで

ある函館山ロープウェイ(株)の一事業部になっています。以前から天候に左右されない事業を立ち上げたいという考えを持っていました。それと第3セクターが得た利益を情報で市民に還元するというコンセプトもありました。

林 杉田さんは創立から携わっているのですか。

杉田 はい。私は旅や函館で生活を始めた体験の中で、テレビやラジオ媒体に違和感を持っていました。「どうして函館で札幌の道路情報を聞かなければならないのか、なぜ渡島地方という括りで長万部と松前の天気予報が同じなのか」というものでした。また、海にはいい波、山にはいい雪があって北海道は遊びの天国なのに、周りの人はどうしてそれを活かさないのかという疑問でした。

学生時代の記憶に、スキー場のミニFMがありました。それはゲレンデの雪質やリフトの運行状況、レストランの混雑状況を放送していました。そこで函館山からの景色をゲレンデに置き換え、

市民や観光客をスキー客にみたと、コンテンツをいろいろ想像しました。私は23歳の素人の若造でしたが、会社はパフォーマンスも含めて若い人にチャンスを与えたようです。いいタイミングに出会えて、ものすごくラッキーでした。

林 旅人としての外からの目が、函館に住むことで、地域を見直すいい機会につながったのだと思います。よく地域づくりでは、「よそ者と若者がすごく大切だ」といわれています。そういう意味では、まさに杉田さんの「よそ者」としての驚きの目や新鮮な目が、会社のいいヒントになったのですね。今それがどんどんまちに溶け込んでいるのは、仕掛け人としてはうれしいことですね。

杉田 そうですね。今では日本各地にコミュニティ放送局があって、とてもうれしいです。

### 函館をできるだけ掘り下げて

林 提供されているほとんどの番組が函館をテーマにしている感じですが、プログラム自体で普通の放送局と考え方が違う面もあるのですか。

杉田 そこは違ったり、違わなかったり、非常にアバウトです。やはりサービスエリアが限られているので、必然的に函館のまちをできるだけ深く掘り下げるといふ番組作りをしています。



林 ずいぶん小さな商店も回って情報を伝えていると聞きましたが、かなり地域密着を意識しているのですね。

杉田 できるだけ市民との接点を持ちたかったので、「いるか号」という中継車で回っています。見えない媒体なので、市民の方に知っていただくためにはぜひとも欲しかったツールです。

林 「FMいるか」のネーミングは、公募で決められたのですか。

杉田 いえ。プロジェクトチームで決めました。「いるか」には三つの意味があり、一つは青函連絡船のマスコットがイルカでなじみがあること。もう一つは、イルカが水中で会話する際の超音波と電波を引っかけたこと。最後に函館湾内でもイルカが見られるような環境にやさしい放送局という願いを込めています。

林 かわいい名前だなと思っていましたが、いろんな深い意味が込められているのですね。

杉田 だんだんとそれが形になってきつつあるかと思います。

### きめ細かい地域情報、善意の気持ちをつなぎながら

林 放送メニューの中では、天気や交通情報などの公共情報をかなり意識しているようですね。

杉田 もともと、そこしかなかったというのが出発点で、それから情報が枝分かれしてきたという感じです。でも、天気や交通情報を簡単に考えていましたが、それを組み立てるまでには苦労や創意工夫がすごく必要でした。開局当初は、地域コミュニティという概念がなく、函館の天気情報や道路情報が欲しくてもありませんでした。それで、函館を細分化した天気や道路情報を出したいという思いから出発しました。

林 札幌から天気を放送する場合、渡島・檜山地方や函館というのがありますが、函館東部や西部というのはないですよね。ここではどうしているのですか。

杉田 東部、西部と大きく分けることもありますが、もっと市民になじみのある函館空港周辺や大野平野、函館市内という表現をしています。

林 すごく身近に感じられますね。

杉田 そうですね。14年前はそういう細分化した情報がなく、天気予報に非常に苦労しました。

林 道路情報も、渋滞情報や工事情報などかなりきめ細やかに出しているのですね。

杉田 現在は、開発局の協力で渋滞情報や路面状況、工事情報などきめ細かい情報を放送しています。

林 FMいるかが、そういったきめ細かな情報をかなり切り込んで得ていったということですか。

杉田 そうです。もともとの圏域をトータルで見る道路情報はありませんでした。警察から情報を得ようとしてもNGでした。そこで、ガソリンスタンドや商店を1件1件回って情報を得ました。

林 そうしたご苦労をされて、軌道に乗せるにはどのくらいかかったのですか。

杉田 やはり3年間ぐらいです。今では気軽に「いるかさん」と声をかけてもらえますが、当時は、情報をいただく前に、コミュニティFMを理解してもらうのが大変でした。もともとなくて暮らしていたわけですから、なぜそんな面倒なことをするのか、ただ仕事が増えるだけと思われました。

でも、何度も通うことで少しずつ認知され、行政や地域の方々からこんな情報があるよと提供していただけるようになりました。

林 そのように苦労なさって得た生活情報や公共情報について、リスナーの反応はどうでしたか。

杉田 最初の放送エリアは半径数キロだけでしたが、それがクチコミで広まり、こっちでもやってよなどの声が増えていきました。これは便利だぞとか、これは役立つぞという意見よりは、何かやりはじめたから頑張れよという善意的なものでした。ですから、まちの人たちと一緒に善意の気持ちをつなぎながら、ここまで来たという感じです。

### 初めての災害を通じて受けた感動



林 これからの安全安心なまちづくりには、災害情報は重要だと思いますが、FMいるかではどういう取組みをされているのですか。

杉田 私ども放送局の方針のひとつに、地域住民の安全確保があります。それは防災や減災で、災害時の生活情報をきちっと把握するのが大前提です。そこで、「防災一口メモ」を放送しています。火事や地震の際の注意事項を2、3時間に1回ずつ放送して常に意識してもらおうという狙いです。もちろん災害時は24時間体制で生放送します。

林 具体的な災害時の放送はあったのですか。

杉田 一昨年、台風で函館市内が部分的に4日間停電しました。

林 あの時は、札幌も大変でした。

杉田 強風による倒木で電線が切断されたのが原因でした。放送局内は自家発電でなんとか復旧しましたが、今度は突然放送が止まりました。函館山のバッテリーが1時間で切れたのが原因です。あれだけ各放送局の送信所がある函館山が停電するなんてありえないと思い込んでいました。復旧作業に山頂へ向かったら、登山道やドライブルートが倒木でジャングルでした。この仕事をやっていて生死を意識したのは本当に初めてでした。山は停電でバッテリーが切れていて、替わりのバッテリーでバックアップしましたが、結局その間1時間くらい停波しました。

林 その後は、復旧作業がうまくいって、普通に放送できたのですか。

杉田 そういう綱渡りの状況で自家発電機に給油をしながらの放送でした。

林 その時の経験が、きっと次への備えとなって活かされるのでしょうか。今の私たちは本当に恵まれた生活をしているから、そういう最悪の状況、シナリオはあまり考えられていないと思います。

杉田 地震や津波、火山については、それなりに想定していましたが、停電が続くというのは想定外でした。

林 そんな決死の放送を聞いて、リスナーの反響もすごかったでしょうね。

杉田 徐々に復旧しはじめると、市民同士がラジオを通じて、「今電気が点いたよ。みんな頑張っ！」、「ロウソクが余ってるから、取りに来てくれればあげるよ」というようリスナー同士の励ましの現象が起きました。

林 電話やFAXで来たのですか。

杉田 そうです。私たちを介さなくても、リスナー同士の情報交換が起きはじめたのです。それは感動で鳥肌が立ちましたね。記録していたものだけで2,000通はありましたが、停電時や処分したものを含めると相当な数になります。

林 本当にコミュニティFMとしての力を発揮したという感じですよ。

杉田 これはたまたまそういう環境に居合わせただけで、私たちの力ではないと思いますが、日ごろからこれだけの人が聞いてくれていたと改めて分かりました。これだけのエネルギーを媒介していると思ったら、改めて緊張感が出てきました。

### 放送は人と人との出会いの接点

林 毎月第2、第4水曜日の10時10分から放送している「開発ふれあいトーク」は、どんなきっかけではじまったのですか。

杉田 私たちから見ると、開発局は道路などの公的な情報をたくさんお持ちなので、ぜひ協力できる関係になりたいとアプローチしました。5年程前の「道の日」に、渡島・檜山管内の道の駅を紹介する特番を提案しました。この特番がきっかけで、次の年には開発建設部の組織や活動の情報を提供する番組を放送したいというお話をいただきました。基本的なコンセプトは開発建設部のいろんな取組みを広く地域の方々に知っていただくという趣旨です。

林 例えば、道路関係ではどのような話題が出てくるのですか。



杉田 道路にかかわるボランティアの取り組みを紹介したり、昨年は国道5号の拡幅工事への理解を求めたりしました。

林 「道の日」のイベントや亀田の拡幅4車線開通イベントは、どういう内容だったのですか。

杉田 「道の日」のイベントでは、函館管内の「道の駅」をいくつか回って、今いるカフェからの公開放送で開発建設部の方に出演してもらいました。また、稚内、根室、函館からキャラバンで札幌に集合する番組にも参加しました。

亀田の拡幅4車線開通のお祝いイベントでは、イベントの内容を広く市民に知っていただきました。冬期でクリスマスも近かったことから、聖楽隊、太鼓などでお祭りらしく演出もしました。また、道路関係者や地域の方にも出てもらい、開通の喜びの声を放送しました。

林 そうした放送を通じて、地域づくりのグループの方々などとの出会いも多いと思いますが…。

杉田 放送は人と人との出会いの接点で、一緒に一つのものを作ると何かが見えてくる感じがして、その連続です。道路のことも、たくさんの方と知り合いになりました。

### 地域づくり活動との連携

林 函館にもいろいろな地域づくり活動グループがあると思いますが、それらの活動との関わりはどのようなのですか。

杉田 今、函館・大沼・噴火湾ルートが、シーニックバイウェイの候補になっていて、今年9～10月がひとつの山場になっています。何とか正規ルートにしたいと、地元の方々が実行委員会を作って活動されています。私たちもFMいるか発行のフリーペーパー「いるか通信」や8月の「道の日」での企画で応援する準備をしています。

林 シーニックでは、地域づくりの皆さんが具体的に協議会を立ち上げて活動しているのですね。

杉田 地元の方々もボランティアですので、発信手段（機能）が弱いのです。FMいるかもまちが



元気でないと生きていけません。単なるメディア媒体ではなく、彼らのように地域のために頑張っている方々を応援することが大事だと思っていますので、こちらでできる企画を提案したり、番組への出演を依頼して皆さんの活動を応援しています。

林 地域ですごくいい活動をしている方々がいても、あまり情報発信できなくて、活動が広がらずに悩んでいるグループもありますよね。

杉田 そうです。そこが皆さんの悩みの種だったりするのです。今までは、広げていくためのコマercialや新聞広告でお金がかかり、ニュース記事として取り上げていただいても一過性で終ることが多いのです。私たちは、もっと掘り下げて紹介したり、ときには一緒になって汗をかく活動をしています。

林 例えば、シーニックに関して単に放送するだけではなく、ゴミ拾いや花植をするというアクションも含めてなのですね。

杉田 はい。本来、活動団体が正規ルートにするためには情報発信を考えなければならないのですが、それを私たちがサポートする形です。

### 経済を絡めるシーニック函館ルートの特色

林 シーニックについて、今後何か具体的なイベントや放送は考えているのですか。

杉田 第1弾として7月1日発行の「いるか通信」で、シーニックを4ページで取り上げます。この函館ルートは市街地を含むのでちょっと個性のあるエリアです。エリアに点在しているコンビニエンスストアを絡めて、休憩場所やお得情報を仕掛けています。

林 それは他のシーニックにはない試みですね。

杉田 エリアの個性を発信しようと提案しました。彼らがFMを使って発信して、その結果得た実績を材料にしてぜひ魅力あるルートにしてもらいたいと思っています。

林 シーニックバイウェイには観光だけではなく、地域や経済の活性化、コミュニティビジネスの創出などいろいろな目的があります。それを本当に実現していくには大変な面もあると思うのですが、他の地域ではなかなかできなかった経済



を絡めるのは函館地区の特色になるかもしれません。

**杉田** 先行事例になればいいと思います。コンビニエンスストアも全道に展開しているので、その事例がもっと広がる可能性があるということです。夢も含んでやっています。

**林** このシリーズでニセコの方にもお話をうかがったのですが、やはり地域にいい職場や経済がないとUターンや移住ができないという話がありました。

函館も同じで、移住したい、Uターンしたいというときに、仕事がなければ思い切れないですよ。そういう意味では、新しい経済を生み出すきっかけになるかもしれませんね。

**杉田** 「地産地消」もそうでした。なんとなく地域に目を向けて食に関する取組みをはじめたら、「地産地消」という言葉が後から付いてきて、それを追求していったらビジネスになっていった感じです。

**林** そういう影響もあって、大野農業高校ではお弁当を作ったりして、次へのきっかけになっていますよね。

**杉田** 農業体験会も、それぞれの農家や学校が主体になってきて、ひとつの役割を果たしたと思います。今は「スローフード体験会」にスタイルを変えてイベントをしています。

**林** 函館のシーニックバイウエイルートは街中が含まれていて、他にはない例だと思います。支笏湖のシーニックバイウェイは、全体のルートに一体感を持たせるのに苦労しています。函館の場合、街中でも景色のいいシーニックバイウェイの雰囲気とルート上にいることを感じられる目印などの工夫は考えているのですか。

**杉田** シーニックに関しては、われわれが主体ではないので、地域で活動されている方々が、FMいるかの各種媒体を効果的に使っていただけるよう支援することが一義です。次に一般の市民はまだシーニックがどういうものか知らないと思いますので、知って興味を持ってもらい、このエリアが候補ルートであることを認識してもらうことが、もうひとつの意義です。今回の仕掛けは、このエリアにニックネームをつける企画です。例えば、追分ソーランラインやオロロンラインのように、市民総意の名称を付けてしまおうということです。

**林** それは面白いですね。

**杉田** それを夏の特別番組で盛り上げます。各団体が地域に持ち帰って、清掃などの活動の場手作り看板を立てるなどの、新たな動きの波ができやすくなる仕掛けを今ちりばめている最中です。

### 函館への思いをメッセージに

**林** 今、開発局は市民の皆さんの声を融合した政策づくり、行政への反映など、いろいろ苦労しながら官民連携を模索しています。それにはお互いが歩み寄り、理解しないとうまくいかないと思います。FMいるかは、その接点を作ってあげられる媒体なのかなという感じがしました。ぜひこれからも頑張ってくださいと思います。

**杉田** よそから来た私ですが、これだけのいい環境やポテンシャルのまちを維持・発展させたいという函館の未来を憂う気持ちがあります。そして、自分たちの家族、これから生まれてくる子供たちが生き生きと暮らせるまちでありたいと思います。そういう5年後、10年後、ひいては100年後へのメッセージを常に放送で発信、イベントやまちづくりに役立てていきたいと思っています。

**林** 今日はどうもありがとうございました。

(本インタビューは、平成18年6月13日に函館で行いました)



FMいるか <http://www.fmiruka.co.jp>

### profile

**杉田 圭夫** すぎた たまお

1966年埼玉県生まれ。'90年明治大学政治経済学部卒業。同年バイクツーリングの途中で函館山ロープウェイ(株)に臨時採用、翌年に職員となり新規事業プロジェクトメンバーとして立ち上げ準備開始。'92年12月24日「FMいるか」開局。以後、統括ディレクターを経て、'03年1月局長に就任。現在、局全体の運営と指揮をとっている。

**林 美香子** はやし みかこ

1976年北海道大学農学部卒業。'76年札幌テレビ放送(株)入社。'85年同社退社後フリーキャスターとして活動。食・農業・地域づくりなどのシンポジウム・講演会にも参加。現在の担当番組エフエム北海道「ミカコマガジン」(日曜朝8:00~8:30)。「北海道文化財団」評議員、「北海道田園委員会」委員、「スローフード&フェアトレード研究会」代表、農林水産省「食と農の応援団」メンバー、「フォーラム・エネルギーを考える」メンバーなど公職多数。著書「ワーキングマザーの元気ブック」(北海道新聞社)、「楽々おかずとおやつ」(北海道新聞社)、「ハーブティを飲みながら」(共同文化社)。